

郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

『和書をもっと手軽に』

～インターネットで市民図書館所蔵の和書の画像をもっと閲覧できるようになります～

郷土資料担当 武田 法子

仙台市民図書館で江戸期以前の和書をご覧になったことはありますか？当館では、幕末から明治にかけて仙台、東京の伊達家に深く関わった岡家から寄贈された資料を中心に約 2,500 点の和書を所蔵しています。

これらの和書については、平成 29 年 8 月に「見る、さわる！古書の世界へご招待」と称して展示会を開催しました。多くの方々に来場いただき大きな反響がありました。私も初心者でしたが、暦や教科書など身近なものの歴史や大槻磐溪など郷土ゆかりの人々の著作物を知り、古書が現代の私たちとつながっていることに感動を覚えました。そしてこれを機に、所蔵している和書について知り多くの方々にも利用してもらえようようにしたいと思ったのです。

そんな折、国文学研究資料館・国立国会図書館主催の「日本古典籍講習会」に参加し、和書の基本の学習とともに、全国の図書館の方々と交流する機会がありました。そこで全国の図書館には様々な古書があり、担当者はそれを提供したいという共通した思いを抱いているということがわかりました（未整理の資料の書誌を作りたいという図書館もあれば、資料の保存や電子化に力を入れたいという図書館もありました）。

私も何かできることはないか模索していましたが、講習会で資料の活用についての話があり、2023 年度までの 10 年間の予定で、大学や専門機関と協働し、30 万点の歴史典籍画像データの作成・公開を目標に「日本語の歴史的典籍画像データベース」の構築が進んでいることを知りました。当館では、和書の一部について書誌の作成、電子化作業がすでに行われており、電子化された画像を館内のモニターで閲覧できるようにしています（下記写真）ので、これらを当該データベースに載せられるように取り組んでみようと思えました。せっかく資料があっても知ってもらわなければ利用にはつながらず、利用しやすくなければ利用は進みません。こうしたデータベースに掲載することで、いつでも誰でもどこからでもインターネット上で利用でき、そして複数の所蔵機関の資料を同時に閲覧できるようになるわけです。

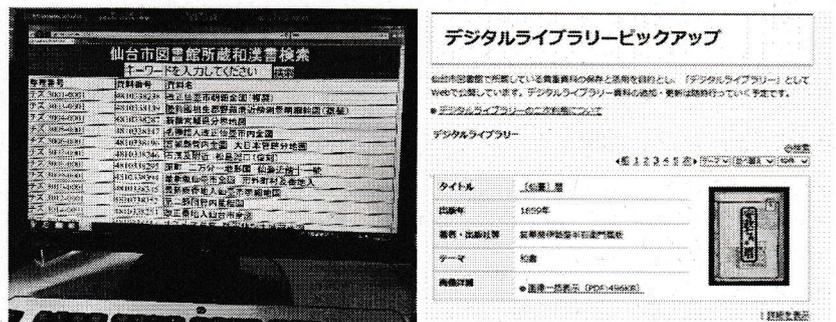
その後、当館の書誌データと画像データの突合作業を行い、昨年末、完成したリストと画像を国文学研究資料館にお送りしました。現在準備を進めており、今夏「新日本古典籍総合目録データベース」等で閲覧できるようになる予定です。どうぞご利用ください。

★新日本古典籍総合目録データベース：

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>

※ 閲覧できるようになる画像は、市民図書館で所蔵する和書のうち約 1,000 点になります。

★当館所蔵の和書について詳しくは、『仙台市民図書館所蔵和漢書目録』をご覧ください。



現在、電子化された和書は市民図書館内で閲覧できます（写真左）。また、仙台市民図書館ホームページ上で約 50 点の和書の画像が閲覧できます（同右）。

火山噴火(資料紹介を兼ねて)

小石川正弘

子どもの頃、遊び場はお墓、何せ寺の次男坊だったので「かくれんぼ」にはびったりな場所。目の前に墓石、それに書かれた年代や戒名そして俗名をよく読んだ。今でも忘れられないことがある。旧家の檀家さんの亡くなられたところの年代を見たら、天明(1781~1788)や天保(1830~1843)だったのであった。子供ながら父から聞いていた「天明・天保の大飢饉」の頃である。1歳、2歳というような幼児の名前も書かれてあった。

新年になり、何気なく飢饉に関する資料調査をしていたら『仙臺郷土資料 第1 天明天保に於ける仙臺の飢饉記録 編集者 阿刀田令造 昭和6年10月発行 宮城県図書館の蔵書にもあり』を見つけたが、残念ながら市民図書館の所蔵リストにはなかった。どんなものか早く見たい。もしや国立国会図書館にあるのではと思い検索をかけたら、やはりありました。早速、「国立国会図書館デジタル化資料送信サービス」を活用し、必要な箇所をコピー。このサービスは大変便利で、古い記録でもデジタル化されていれば閲覧およびコピー可能なので利用者数がどんどん増えている(仙台市図書館の利用者カードを持っている方のみ利用可能)。

前記資料の冒頭にこんな記載があった。

一、天明三年氣候不宜次第之事 附、天變地變之事

天明三年正月四日朝日三並出る。同七月十三日にも日輪二ツ並出候。諸人これを見る、・・・中略 七月七日信濃国浅間山大焼にて近國えは碎石夥敷降。江戸は七月七日振動致、碎石降候なり。・・・

上記述のように、浅間山の大噴火の様子が詳しく記述されてある。天文学的に見ても「朝日三並出る」とか「日輪二ツ並出候」ということはあり得ない。おそらく気象現象だと思われる。さらに詳細に調べていくと『理科年表 第93冊(令和2年)』R403/リ(P747)には、浅間山の噴火記録が載っていた。1783年5月9日から始まった噴火は7月15日まで続き、火砕流、火災泥流、溶岩流、鬼押し出し、噴出物総量2億m³、死者1151人という大惨事となった。その1年前の天明2(1782)年と天明3(1783)年に青森県の岩木山が水蒸気爆発を起こしている。この時の両噴火の粉塵が大気中にも侵入し、日射量低下による大冷害をもたらした天明の大飢饉となった。東北地方で約10万人の死者を出した。さらに、他資料によれば、1783年6月3日アイスランドのラキ火山の大噴火、同じくアイスランドのグリムスヴォントン火山の1783年から1785年にかけての噴火も飢饉に影響しているらしいとの指摘もある。

後半には天保の飢饉について記載されているが、内容を少し列挙しよう。

天保四年癸巳五月下旬より天色陰々として快晴なるは稀なり。折々雨降り暑氣薄く、六月土曜に至りても暑尚薄く、萬物自然と節をくれ出穂よろしからず・・・とあった。

天候不順を物語った一文である。江戸時代に起きた飢饉は 寛永(伊達綱宗時代)・享保(伊達吉村時代)・天明(伊達重村時代)・天保(伊達斉邦時代)があり、当時の当主はどのような思いで飢饉に対処していたのだろうか。そして、最近世界各地で起きている火山噴火は何を物語っているのだろうか。

■ 編集後記

「郷土のかぜ」は多くの皆様のご協力を得て、第20号に到達することができました。発行を開始した頃、ネタ探しに郷土コーナーの資料を見たり、レファレンスに来館された利用者の方とスタッフとの会話に聞き耳を立てたりしたものでした。テーマが見つければ資料集めが始まりますが、県内の図書館にないときには、国立国会図書館のデジタル化資料送信サービスも活用しました。また、多くの熱心な方々に寄稿していただきましたが、皆さん資料を探しているときからすでに「何か違うぞ!」という雰囲気があり、寄稿をお願いするとどの方も興味をそそられる研究をされていました。皆さんと郷土談議をしているときに、私にとって一番楽しい時間でもありました。